

がっこうぐらし！RTAをするつもりでした。予定変更して生存人数
最大数更新を狙います。

鎖佐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ツイッターを見ていたら神の呟きが聞こえてきたので書きました。
一発ネタです。

(RTAじゃ)ないです。
(完結もし)ないです。

目 次

どちらくそ切れ者で下ネタにメチャクチャ理解のある、狐耳のついた
赤髪の盲目で半身不随のT S 転生ボクつ娘お嬢様に転生しました

1

さいしょのひ（前）

18 9

さいしょのひ（中）

どちらかそ切れ者で下ネタにメチャクチャ理解のあ
る、狐耳のついた赤髪の盲目で半身不随のTS転生ボ
クつ娘お嬢様に転生しました

レギュレーション作成からいまだ記録一位のアサルト氏に挑戦す
るRTAはゞじまゝるよ

使用キャラは竜胆 葛葉。全盲に下半身不随というどうやつて生き残るのこれ? というキャラです。主人公クリアコンプをする際に最大級の障壁になること間違いないしのキャラですが、プラスファイート「管狐」のお陰で結構楽しい遊びが出来ます。まあRTAは遊びじゃないんですけど

早速キャラクリエイトしていきましょう

すてーたす

体力	4	—	1	貧弱ウ。季節の変わり目には風邪引くらしい。
筋力	3	お前コレで車椅子動かせんの?		
知力	6	平均以上ではある。賢くは見えないけど。		
直感	4	+ 6 過敏症。感度3000倍		
持久力	2	なめくじ		
すきる&ふいーと				

「息遣い」(固有スキル)

声や表情は取り繕える。でも、呼吸と鼓動は嘘をつけない。NPCの嘘が分かる。

「反響理解」(固有スキル)

訓練により獲得した知覚スキル。音の反響により半径3mの範囲を正確に認識する。

「第六感」(直感カンストボーナススキル)

超能力に匹敵する程の超直感。極めて高精度の予想・予測が出来る。

「管狐」(選択プラスファイート)

妖怪管狐に執り付かれる。狐耳が生える。コスト2P

「全盲」（固定マイナスファイアート）

致命的な知覚マイナスファイアート。視覚情報の一切が無くなる。成長ポイント +2

「半身不隨」（固定マイナスファイアート）

致命的な行動マイナスファイアート。足の使用が不可。成長ポイント +2

「病弱」（選択マイナスファイアート）

生まれつきの病弱体质。体力低下と空気感染率上昇。成長ポイント +1

はい、主人公龍胆葛葉ちゃんのキャラクリはOKですね。
では次、残った成長ポイントで管狐をクリエイトします。

『管狐』する

「憑依」

目を介して管狐の分け身を憑依させることが出来る。憑依した
キヤラクターは狐耳が生える。

「言伝」

憑依したキヤラクターと距離を無視して会話できる。

「覗見」

憑依したキヤラクターの見聞きしているものを覗くことが出来る。
以上ですね。

管狐は利用するとなると最低4P必要なクソ重スキルです。コレ
をとつた場合、まず間違いなく非戦闘員と化します。まあ、どう考
えても葛葉ちゃんは戦闘員ではないですよね？もうお分かりかと思
いますが、葛葉ちゃんは管狐で前線にでるゴリラなどに指示を出す指揮
官です。

さて、やつていきまつっしょ

がつしゃーーーん!!!!

ちょ、トラツ k

ぐべれ



「くずはちゃん!! 大丈夫!!」

白い。真っ白な空間だ。もしや俺はこれから転生でもするのだろうか。

「きゅ、救急車!! すぐに呼ぶから!!」

いや、救急車なんて呼ばれるくらいなんだから、案外助かったのか?
?くそ、目が見えない、まさか事故の怪我か!?

「う、動かすな!! 血が!! 不味いって!!」

「く、くずはちゃん、だめ、死んじゃダメだつて!!」

「葛葉!!」「くずはちゃん!!」

・・・俺は葛葉なんて名前じゃないぞ?

え。
え、うそだろ?

はい、というわけで無事に竜胆葛葉に転生しました（クソ）。

アレから救急車で運ばれて、緊急治療を受けて、どうにか一命を取り留めた。は、良いものの、脊椎損傷によつて全く足が動きません。痛覚はあるんですけどね。いやー参つた参つた。え? 目? 元から見えませんけど?

はーないわ。マジなえる。美少女（多分）に転生したのに、全盲の下半身不随。加えてがつこうぐらしのせかいだとお・・・許せないつすよね?

コンコン

「葛葉、起きてる?」

あくはいはい起きてますよお? ちよーとばかし不機嫌かも知れ

ないけどなあ

「・・・入るわよ？」

ふーむ、聞き覚えのある声だ。うん、まあ、母様だなあ。いや何で覚えてるんだろ。転生前の記憶もしつかり受け継ぐタイプの転生だつたか。

「おはよう、葛葉。少しは落ち着いたみたいね」

おうおうくすぐつたいやねえかヤメロ撫でるな。

「・・・葛葉が助けた若狭瑠璃ちゃん。ちゃんと助かつたわよ」

・・・あーなるへそなるへそ。りーさんの妹のるーちゃん救出イベやつたんかアレ。ほー、なる程ですわ。で、一緒にいてたのが由紀ちゃんと胡桃ちゃん。なんや原作組みが一同に介し取るな。まあエエことやわ。パンデミック後どうなるかは・・・(わから)ないです。「その、若狭瑠璃ちゃんのご両親が、お礼に来たい、って言つてるけど、どうする?」

お礼と言われてもなあ。むしろちゃんと助けられずに申し訳ないくらいやつてのに、助けられたはいいけど助けてくれた人が半身不随とか、トラウマやん? 瑠璃ちゃんには秘密にしたいなあ。

「そう。ならそう伝えるわ。葛葉は足の骨折で入院してる。瑠璃ちゃんにはそう伝えましょか」

流石母様話が判る。ところで俺の退院何時ぐらいよ? あと正直車椅子で動ける気がしない。

「退院は3ヶ月後。電動の車椅子を手配しているから、心配しなくていいわ」

流石母様仕事が早い。あと病院食が味気なくて
「我慢しなさい」

母様厳しい。

母様に林檎食べさせてもらつて、用を足したあと、すつきりした頭で考える。どうするよあのパンデミック。

まず俺はすでに高校3年生、由紀ちゃんの同級生だから何時事件が起きててもおかしくない。事件を未然に防ぐことは不可能に近い。加えて、海外にも感染者は出る。逃げることは出来ない。でも・・・俺

はウイルスの特攻薬のありかを知っている。原作通りなら……那沼の水が特攻薬だ。決して抗ウイルス剤は特攻薬等ではない。とは言え、やはりこの情報でもパンデミックは防げない。ランダルコーポレーションにそう電話したところで鼻で笑われて終わる。なんなら情報漏洩の対策で口封じに来てもおかしくない。

・・・考えろ。ハッピーエンドの攻略チャートを考えるんだ。

条件1 全員、いや、生存人数最大を更新してやる。大学とも連携を取る必要があるかもしねれない。

条件2 攻略はあくまでパンデミック解決だ。学校脱出じやない。

条件3 ・・・サンプルが必要だ。発症していない感染者というサンプルで、ランダルコーポレーションを説得する必要がある。

・・・出来るか？セーブ＆コンティニューなんて無い。一発勝負。試走すらない挑戦。

見せてやるよ、スーパープレイつて奴を。



心臓が飛び出るかと思つた。

あの子がまた無茶をしたらしい。しかも今度はトラックに轢かれただなんて。生きた心地がしないまま、私は病院に駆けつけた。

「一命は取り留めました。明日には目を醒ますでしょう

「よかつた」

崩れ落ちるようにソファに腰が落ちる。あの子の努力と苦労が何も実らずに終わるのだけは耐えがたかった。良かつた。本当に良かった。

「……ですが、後遺症が残る可能性が、あります。それも、極めて深刻な

「……こう いしよう？」

「はい。下半身のダメージが酷く、恐らく動かすことは、出来なくなるでしょう」

なぜだ。なぜあの子からばかり取り上げる。なぜ？なぜあの子な

んだ?

目の見えぬ子に産んだ自分が憎い。

あの子を轢いた運転手が憎い。

あの子の怪我の原因になつた子供が憎い。

神様が、憎い。

「どうして!!あの子ばっかり!!」

それから、私は女中に引きずられるように家に帰つた。やらなければならないことがある。

葛葉の入院の準備は女中に任せ、私は夫に今日の出来事を説明した。

「ふむ、それは大変だな。金に糸目は付けん、必要な物を買いなさい」
「…!!分かっていた!!この人が葛葉に何の興味も無い事ぐらい!!
寧ろ、金を出すと言つただけまだマシだ。ヒトデナシであることに変わりは無いけども!!

結局、私は一睡もできないまま、その日を過ごした。

「ん・・・体痛い・・・ん」

「葛葉? 起きたの?」

「あと5分」

「…・はあ、呑気な娘だこと」

事故から2日後、医師の見立て道理に葛葉は起きた。

きつとショックを受けるだろう。目が見えない上に下半身不随。一体どれだけの苦労があるのか、最早私には想像すら出来ない。でも、それでも娘にはちゃんと生きていて欲しい。

「そんなこと言つてると、ご飯片付けるわよ」

「それはいやあ・・・ん? 何この声」

「何つて、私の声よ」

がばりと布団をめくり上げた娘。ようやく目が覚めたらしい。

「いやそうじゃなくて、んん? 足が、何コレ気持ち悪い!!」

ガタガタと体を揺する葛葉。さつきまで静かに寝ていたのに起き

た途端騒がしい。もう少しお淑やかに出来ないのだろうか。出来ないのだろうなあ。

「葛葉。じつとして。大事な話があるの。ちゃんと聞いて」

「え？ だれ？ …… 母様？」

「そう、母様よ」

「え、あれ？ どうなてんの？ あれ？」

どうやら事故の後遺症で記憶の混濁があるらしい。詳しい話は先生が着てからだろうか。

「お名前は？」

「ほ・・・・・・・ 竜胆 葛葉」

「年齢は？」

「さ・・・・・ 17」

「通っている学校を教えてください」

「・・・・・ 巡ヶ丘学院高校」

「手を出してください。紙をお渡ししますので、読んで下さい」

「・・・・い、ろ、は、に、ほへと、ちりぬるを」

「結構です。最後に、この部屋には何人居ますか？」

ツチ

「4人です」

「なる程、記憶に若干の混濁が見られますか、問題は無いでしよう。その年齢でエコーコーディションを身に着けているとは、素晴らしい能力です」

「ありがとうございます」

「では、事故のあった以前の記憶はありますか？」

「それは、さっぱりです」

「飛び出した子供は、覚えていませんか？」

「・・・・あ。そうだ帽子の子……で、どうなつたんだつけ？」

「なる程。葛葉さん、貴女は……」

医師の口から何が起こったのか、説明されていく。葛葉の表情は硬

く、恐怖や混乱が見て取れる。けれど取り乱す様子は無い。胆の据わった娘で良かった。

「下半身、不隨」

「はい。どうやら痛覚は残っているので、不完全型の脊髄損傷になります」

「そう、ですか・・・」

「現実感が湧かないのは理解出来ます。ですが、どうか落ち着いて、受け入れるところから始めてください。お母様、暫く一緒に居てあげてください」

「はい、ありがとうございます」

病室を出る医師を見送っている間、ふと呟きが聞こえた。

「ボクが、竜胆葛葉？」

さいしょのひ（前）

学校でエレベーター使えるとかマジ特権階級。屋上には行けませんけども。

はい、というわけでなぜか「がつこうぐらし！」の世界に転生した走者が通りますよっと

「あー・くずはちゃんおはよー!!」

はいおはよー。今日も由紀ちゃんは元気だねー。可愛いよー

「えへへー、くずはちゃん今日はテスト最終日だね!!自信の程は?」
ヨユーヨユー任せとけって。コレでも大学卒業してるんだからさ。寧ろ良く点字でテスト作れたなこの学校。すげえよ。因みに今が最後のあがきの時間なんだけども、由紀ちゃんはどうなんですかねえ?
「わたし?ふふん、今回はちょっと自信あるよ!!」

あ、これあかんやつや（第六感）

コレ勉強してない奴のなんかいける気がするつて奴や（確信）
はー、まあ勉強なんてフツーに授業受けてたらフツーに点数取れる
はずなんですけどねえ?まあ80は取れますよ。フツー。

「ごめん。いまくずはちゃんの事嫌いになつた」

まつて。ゆるして。

ホラ見て、友情の証。おそろいのニット。ね?ウイーアーベストフレンズ。ね?

「じゃあね。くずはちゃん」

まつて!!ニット脱ぐ!!まつて!!おねがいまつて!!一緒にお風呂入った仲やん!!将来を誓いあつた仲やん?まつて!!
「もう馬鹿にしない?」

・・・おばかは事実やん?な?俺嘘が嫌い。な?ホラ由紀ちゃんはその純心さが魅力的な訳で決してテストの点数が赤点ギリギリでもその魅力が欠けることはないやろ?な?

「・・・またむつかしいこと言つて誤魔化す氣だ・・・」

そうじゃないんだよ由紀ちゃん。実際俺の入院期間中もしそうじやないんだよ由紀ちゃん。実際俺の入院期間中もしそうじゅう顔出してくれたの結構励みになつたし、テストのたびに泣き付

いて来るのも可愛いところだし、赤点回避の為に30時間も勉強見てあげてる俺の努力も認めて欲しいなあ!!

・・・おつかつしいなあ。葛葉の記憶に違いが無ければ・・・ほぼほぼテスト内容について教えてるんだけど。

「ビクツッ!!」

可笑しいなあ・・・。葛葉が教師の授業からテストの問題を予測して、平均点は確実に取れる練習問題を作つてあげたはずなんだけどなあ・・・

「あ、あのねくずはちゃん。意地悪言つたのは謝るよ」

・・・今回のテストで平均点下廻つたら、俺も友達付き合い考えないとな。

「まつて!!まつてくずはちゃん。えっと、あのね。そ、そうだ!!テスト範囲で分からないところが」

「おーい由紀。朝礼始めるから席に着け」

「あわわわわ」

・・・可愛い。ホラ、赤点だつたら補修付き合つてあげるから。さつきと座る!!

「!!約束だからね!!」

ハイハイ約束約束。

・・・まあ、テストの採点すらされないだろうから、赤点もクソも無いだろうケド。

今日だ。学校が半日で終わつて、部活が再開する、梅雨前の日。中間テストの最終日。

今日、日常が壊れる。

発生時刻は4時、下校の放送は5時。約1時間の地獄。

彼らの出現はグラウンドから始まり、校舎内でも発生する。特に職員室前は地獄だ。詰め掛けた生徒の一人が突如発症。一網打尽になる。

尤も、止める気は無い。パンデミックに際して学校の食料で少なくとも1ヶ月は持たせたい。それ以上の人数は、悪いが死んでくれるほ

うがありがたい。

命の優先順位は俺が決めさせて貰う。

ま、とりあえずテスト受けよう。じゃ俺別室なんで？サラバダー！

はい、放課後（13時）になりました。早速校内探索に行きましたよ。由紀ちゃんは補修です。

『くずはちやんくずはちやん!! いみじつてなに?』

そこからかあ。まあ使う言葉じゃないし、由紀ちゃん暗記系がゴキブリより嫌いだもんねえ？

『じ、Gの話は良いの!! えっと、素晴らしい？ 酷い？ え？ どつち？』

『なる程!! 「はいめぐねえ!! マジやばくね! ··· え？ 違う？ でもくず

はちやんが』

笑えれば良いのかな？

それについても管狐までしつかり機能しているとは行幸ですわ。コレは幸先いいですよ？ はいそこ!! がつこうぐらし！ に転生して幸先もクソも無いとか言わない。全盲十下半身不随でお先真っ暗とか言わない。真つ白じやボケ。

ハイハイ、では早速、仕込みをやつていきましょう。

今回のチャートでは屋上に行きません。行つたが最後、初日露天泊が決定します。病弱な俺には耐えられません。なので逃げ先は3階の他に人の居ない、鍵の掛けられる廊下側に窓の無い部屋。具体的には多目的トイレ、資料室、準備室、放送機器室などです。生徒会室や校長室は人がいる可能性があるので除外。あと、例の地下室。暗証番号はXXXXXY YYYY 巡々丘学院高校の電話番号逆から8桁。しかしこれも問題がある。俺には暗証番号の数字の並びがわからない。点字は無かつた。適当に押してみるのも悪くないが、1階でそれは難しい。加えて、入つてすぐ階段がある。階段対応の車椅子ではあるが、倒れたら終わりなのにそんな冒険は出来ない。

つてああ、また思考がシリアルスになってしまった。イケナイ。俺の性質じゃないのにさ。

まあとにかく、まず避難場所は準備室か多目的トイレ。出来れば準備室に一人連れ込みたいですね。

準備室の鍵は一般的な鍵です、ハリガネ一つあれば開けられる。ホラ。

『ねえくずはちゃん。撥音便ってなに?』

うわびっくりした!!なに?由紀ちゃん

『やつぱり忘れてたんだ‥‥ねえ葛葉ちゃん。撥音便なんて使うことある?』

もう使うなあ。読みてが読んでとか。あ、撥音つて「ん」ことだよ?

『ん?じやあん音便でいいよね?』

しりとりが終わらなくなるじゃんwww

『ん音でもん音便でもんでも終わるから大丈夫だよ?』

‥‥つち。馬鹿にしやがつて。

『あー今舌打ち「丈槍さん?聞いてますか?」「はい聞いてます!!』

よし、探索再開。今いるのは物理準備室。はつきりいつて本命です。中央階段に一番近く、トイレが隣。つまりチョーカーちゃんと出会える可能性がある。そうなれば夜になつたあとで3階制圧戦が可能になります。武器になりそうなものは‥‥

「梯子」

威力4 非殺傷武器 リーチ長

壁に掛けて昇るための道具。不安定なときはもう一人に押されて貰おう。武器として使えないことも無い。

あー梯子ぐらいしかワカンネ。まさかビーカーを投げつける訳にもいかないし、下手に触れないや。

でも、紐は必須なんだよなあ。ロープがありそうなところ。1、2

階を中心を探してみようか‥‥まずは被覆準備室かな。

ハリガネでー、カチヤン

お邪魔しまーす。え？鍵掛けてたって？ハリガネで開けられるほうが悪い。

では早速調べていきましょう。

「糸」
クラフトアイテム。衣服修繕に使用する糸。武器の作成には心許無さ過ぎる。

「紐」
クラフトアイテム。衣類に使用する木綿の紐。武器や罠などにも使えるが、強度不足は否めない。

「布」

クラフトアイテム。木綿で出来た布束。衣類の素材になる他、包帯としても使える。

「ロープ」

クラフトアイテム。縛るならコレ。武器の作成や罠、バリケードなど幅広く使用する基本素材。集めておこう。

なかなかの収穫です。とは言え、持ち歩くには嵩張りすぎなので、固めて扉前に置いときましょう。扉の向こうに人が居ないことを確認してから・・・お邪魔しました。

あとは、技術準備室と保健室も行つておきたいですね。特に保健室は荒らされて酷いことになりますから。包帯とテープとが欲しいですね。消毒液は購買にもあります。さて、手に入りますかねつと。

技術準備室

「ロープ」

「ワイヤー」

クラフトアイテム。武器によし、罠によし。使い勝手のいい便利な素材。コレを便利と思つたらあなたはベテランサバイバー。

「ハリガネ」

クラフトアイテム。武器の作成に使用する素材。あんまり良くないことも使える。

「皮手袋」

手袋 防刃性

装備アイテム。指先を保護する牛革製の手袋。ワイヤーやハリガネを加工する際、怪我しなくなる。

「ヤスリ」

威力1 非殺傷武器 極短リーチ

加工アイテム。表面を滑らかにしたり素材を薄くしたり出来る。武器としては使わないほうがいい。

「ノコギリ」

威力4 殺傷武器 短リーチ

加工アイテム。素材を切断する道具。武器として使用するとすぐ壊れるので止めておいたほうがいい。

保健室

治療アイテム。患部の止血や固定など、場面を選ばない基本アイテム。

「包帯」

治療アイテム。滅菌済みの患部保護ガーゼ。出血を伴う外傷に使用しよう。

「消毒液」

治療アイテム。満5回分の消毒液。傷の消毒にはコレ。戦う人のライフルライン。

「テープティングテープ」

治療・補助アイテム。捻挫の治療や予防が出来るテープティングテープ。使用にはスキルが要る。

パーフェクトだ。最高の収穫と言えるね。

もしかすると初日に最低限のバリケードすら作成できるかも知れません。因みに最低限のバリケードは階段にワイヤーを張り、足を引っ掛けで彼らを転ばせる仕掛けです。僅か3体で壊れますが夜の

大人しさを考えれば十分です。これらは物理実験室においておきましょう。

【終わつたあ!!! 葛葉ちゃん補修終わつたよ!!】

おつと、もうそんな時間ですか。
気付きました。

『わたしはりーせんところに遊びにいくね! くすはぢやんはどうするの?』

わたしはちよこの本の続きを読みたいんで、まー行くわ。多分行かん。

行かん まありーさんはいまだに墓葉に負ひ目を感じてゐるそ
なので氣を使わせるのも良くないでしよう。

だよね?』

そうそう、そういえば、今の時間なら胡桃ちゃんも部活かな？屋上なら見えるんじゃない？

【あ
そうかも!! よし
行ってみる!!】

よし、これで由紀ちゃんの「屋上は行く前は図書館はよる」という行動は防げたと見ていいでしよう。

時刻は15時05分。あと55分。残りの仕掛けに。向かいま
しょうか。

今回のチャートにおける救助予定者は以下の通り。

丈櫻由紀 惠比須沢胡桃 若狭悠里 若狭瑠璃 直樹美紀 祐堂圭

相木貴介 墓塚絶
佐倉恵

自分を含めて10人。地下の資源を考えれば、まだ余裕はある。と
いう程度の人数です。本音を言えば男性をもう一人追加したかつた
が仕方ない。信用できない人間を入れられる程甘い状況じやない。
要所にケーライ設置。

せめて教師陣から一人、神山先生なんかベテランでめぐねえの依存先としては特にありだなあ、とも思うが・・・あの人今職員室・・・

あ。

エスカレーター電源遮断。

・・・オリチャ一。発動しようか。

へい神山先生。なんか、化学準備室の扉が開け放しになつてたんすよ。薬品とかもあるしやばいですよね？（マッチポンプ）「化学準備室が？全くもう一番開け放ししたらいけない場所じゃない!!」ありがとう竜胆さん。

いえいえ、それじゃ、お邪魔しました。

へい由紀ちゃん？胡桃ちゃん走つてる？

『あ、くずはちゃん。ううん今先輩が見本見せてるところ』

ほく。胡桃ちゃんに？先輩も好きだね

『ね、早く付き合つちゃえばいいのに・・・「おーい、くるみちゃん!!』「恥ずかしいからやめろー!!」「くるみちゃんがって人前でいやついてる癖に!!」「は!?ば、お前!!』

・・・ゲーム通りの会話だ。これがゲームか現実か。何て考察はするつもりはない。強いて言うならば、ゲームは投げ出せる。現実は投げ出せない。だからこれが、現実だ。

めぐねえ。さつきから由紀ちゃんが屋上ではしゃぎ廻つてるんだけど？

「あら、丈槍さんが？・・・正直こつそりお手伝いくらいなら良かつたんだけど。さつきの大声はわたしも聞こえたし、そうね。一言注意しておこうかしら？」

はーい。いつてらあ。

あ、神山先生。開いてたでしょ？

「ええ、荒らされた様子も無いし、ただの閉め忘れね。教えてくれてありがとうね。竜胆さん」

いえいえ。実はんですけど。物理、

『くずはちゃん!! なにかおかしい!!』

時刻 16時00

地獄の始まりだ。

さいしょのひ（中）



わたしの友達のくずはちゃんは凄い人だ。なんと、目が見えないのに見えるのだ!!

本人に聞いたら音の反響で物の場所が分かるらしい。つまり音で見てる!!

つて言つたらそれは違うつて言われた。目だつて光の反射を見るんだから、そんなに間違つてないと思うけどなあ・・・

・・・3ヶ月前の事故でくずはちゃんは更に足が動かなくなつた。このくらいなんでもないつて笑つてるけど。目が赤かつた。きつと泣いてたんだ。

うん。たとえ強がりでも、くずはちゃんが笑うならわたしも笑う!! 暗い顔してたらきつともつと無理をする。くずはちゃんはそういう人だから。

「あ、くずはちゃんおはよー!!」

「あら、おはよう由紀ちゃん。今日も可愛いね」

「えへへー、くずはちゃん今日はテスト最終日だね!!自信の程は?」

「フフン、ボクの頭なら勉強で躡くことは無いね。そういう由紀ちゃんは?最後の悪あがきしないの?」

む。このナチュラルに頭いいアピールしてくるのは頭に入る。わたくしだつてやるときはやるんだ。

「わたし?ふふん、今回はちょっと自信あるよ!!」

「あーコレは今回も赤点ギリギリかなー。おかしいなー。普通に授業受けてたら80点は取れると思うんだけど」

「ごめん。今くずはちゃんの事嫌いになつた」

ぜつゆる。これは断固としてゆるせない。そもそも普通に授業うけて80点なら皆ちゃんと受けて無いじやん。平均点70くらいなんだから。

「まつて許して、謝るから。ね?ほら、親友でしょボク達。親友の証」

そう言つておそろいのニットを指差すくずはちゃん。

アレ中身が入ってるんだよね。狐耳。ぴよこぴよこ動いて可愛いんだけど。隠すようになちゃつた。・・・触らせてもらおうかな・・・いや駄目!!今回こそ断固とした姿勢でわたしは怒っているということをアピールしなければ!!

「じゃあね。くずはちゃん」

「まつて!!まつて由紀ちゃん!!」

おお!!凄い車椅子でドリフトした。縋りつかれては振りほどけない。

「ね!?謝るから!!ごめん!!ごめんなさい!!言い方悪かつたよね。許して!!ね?ほら一緒にお風呂に入つた仲でしょ?将来結婚しようつていつた仲でしょ?ね?」

・・・涙目上目遣いのくずはちゃんかわいい。ニットの中で狐耳がペッターンってなつてるのも良き。

・・・ハツ、今の考えは良くないヨクナイよ。ブンブン。

あーしかたないなー、どーしても許してほしーなら。わたし優しいから許してあげなくもないけど?

「もう馬鹿にしない?」

「いやでも・・・由紀ちゃんはお馬鹿だし」

ゼつゆる。だんじてゆるさぬ。ゼつこうだ。

「でもでも由紀ちゃん魅力は嘘つけないと、とか、表情に全部出るところとか、純粹な心が可愛いんだよ!!テストの点数なんておまけだよおまけ!!」

くずはちゃんがテストの点数をおまけって言つたら、ちょっとシユミ悪いと思う。それに、くずはちゃんに嘘付いたらばれるし・・・「・・・またむつかしいこと言つて誤魔化す氣だ・・・」

「違うんだよ由紀ちゃん!!ほら!!ボクが入院してた時も3日に一度は来てくれたよね!!あれ本当に励みになつたんだよ!!愛されてるんだなつて、ね。・・・そ、それに赤点回避のために30時間も勉強を見てあげてるボクの努力も評価してほしいかな!!」
む、むう。必死だ。今ぽろつと赤面物の発言でたよ。まったく人前で恥ずかしいなあ。

「つていうか。なんで赤点ギリギリなの？テストに出るところ。全部教えてたよね？ボク」

「ビクツ」

や、やばい…。確かに、確かにくずはちゃんに教えて貰うと、毎回テスト内容ドンピシャなんだけど…やつぱりむつかしい物はむつかしいって言うか…やつぱり分かつてなかつたつて言うか…：

「あ、あのねくずはちゃん。意地悪言つたのは謝るよ」

「…やつぱり、人の努力を無駄にするような人とは、ちょっと友達にはなれないかなあ…!!」

「まつて!!まつてくずはちゃん。えっと、あのね。そ、そうだ!!テスト範囲で分からないところが」

「おーい由紀。朝礼始めるから席に着け」

「あわわわわ」

「ふふ。ほら、補修になつたら付き合つてあげるから。さつさと座る!!」

「!!約束だからね!!」

「…うん。約束ね」

よーし、頼むぞ鉛筆フォーチュン号!!わたしの赤点回避は君に掛かってる!!

「そんな!!」
めぐねえから告げられた最終宣告。今日はくずはちゃんと遊ぼうと思つてたのに…。
「ふーん。じゃボクは図書館で本でも読んでるから」「ま、まつて!!補修手伝つてくれるつて」「ノート未提出の何を手伝えばいいのさ」

「あう」

む、胸が痛い。くずはちゃんが正論で虐めてくるよう・・・
「まつたくもう、ほら、ボクの目を見て」

「あ、うん!!」

くずはちゃんに言われて目を合わせる。くずはちゃん目が見えないからわたししから合わせないといけない。

わたしが一方的に見つめること3秒。いつものように頭に違和感が出てきた。狐耳だ。

まあわたしのニットに隠れて見えないんだけどね。この状態になると遠くにいてもお話できるの!! テレパシーって奴!!

『分からぬことがあります!! たら教えてあげる。行つてらっしゃい』

「うん!! 行つてきます!! さあめぐねえ!! 行こう!!」

「あなた達、仲いいのね・・・あ、あとめぐねえじゃなくて佐倉先生!!」

なんだか顔の赤い先生を連れてわたしは補修に立ち向かうのだった。

『終わつたあ!! 葛葉ちゃん補修終わつたよ!!』

ながく・・・ながくくるしいたかいたかいだつた・・・!! けれど、わたしは乗り越えたんだ!!

『おーおつかれー。今良い所だから、後でねー』

酷い。冷たいよくくずはちゃん。読書の邪魔をすると凄く怒るから、今は話しかけられない。

・・・なら、屋上に遊びに行こつかな。

『わたしはりーさんところに遊びにいくね!! くずはちゃんはどうするの?』

まさかずつと読書ということはないよね。普通活字なんて1時間見てたら頭いたくなつちやうよ。マンガは別だけど。

『行けたらねー』

『くずはちゃんがそう言うときつて大体来るよね? ツンデレさんなの?』

『行かない。それに、りーさんもまだ負い目があるみたいだし、今は時間空けるよ』

りーさんは3ヶ月前の事故のとき、道路に飛び出したるーちゃんのお姉さんだ。別にりーさんが悪い訳じやないし、るーちゃんもつい飛び出してしまつただけ。運転手さんもおかしな運転をしてたワケじやない。だから、あの事件は、きっと時間が悪かつたんだ。

りーさんに負い目があるつていうのは、きっと間違いじやないけど、でも、時間を空けるよりは一緒の時間を過ごしたほうがいいと思う。

『うーん、気にしなくてもいいと思うけど……でも分かつた。図書室だよね？』

『そだよー。あ、今の時間なら陸上部も部活中かな？くるみちゃんにがんばえ～って言つといて』

『あ、そうかも!! よし、行つてみる!!』

わたしはくるみちゃんの走つてる姿が結構好きだ。全力!! って感じが伝わつてくる。コンマ数秒を縮めるために何時間も練習して、トレーニングして、そして大会に出る。いわゆる結果が全ての世界つてやつ、わたしには凄く厳しい世界だと思う。でも、くるみちゃんはそこで戦つてる。まあ、本命の理由は皆知つてるんだけどね？

あと、わたしは・・・くずはちゃんの読書をしてる姿が好きだ。目を閉じて、真っ白な本を指でなぞると、ほんの少しだけ表情が変わるの。その姿が、とっても綺麗なんだ。

・・・図書館行つて見ようかな。でも、なんだろう。きっと、そこには居ない気がする。

やつぱり屋上に行こう。

「お邪魔しまーす。りーさん遊び、じやなかつた。手伝いに来たよ!!」

「あら由紀ちゃん。いらつしやい」

額に汗して土を弄るりーさん。6月はまだ暑くはないけど屋上でお日様にあたり続けるのは結構熱い。

「あれ? りーさん一人?」

「ええ。畠のお手入れはもう殆ど終わり。今は私が個人的に育ててる
シユガートマトのお世話をしてるの」

「シユガート？砂糖になるの？」

「そうじやなくて、お砂糖を振ったトマトみたいに甘くなるの。結構
難しくて、売り物みたいにはならないと思うけど・・・」

「そう言つてリーサンはトマトの苗を見る。トマトといえば・・・」

「くずはちゃんに？」

「ふふ。やつぱりお見通しね。そう。好物がトマトらしいから、思
い切つて育ててみようと思つて」

「そう言つて笑うりーさんには、やつぱりくずはちゃんへの負い目は
無いと思う。あるのは純粹な感謝の気持ち。だから、あとはくずは
ちゃんの気持ち次第なんだ。

「よかつた。くずはちゃんがさくらーさんはボクに負い目があるか
くつて言つて会おうとしないの」

「うーん、負い目があるのは間違いないけど、私達が葛葉さんに罪
悪感を感じるのは違うと思うのよ。勝手な意見かも知れないと、
「助けさせてごめんなさい」なんて、失礼じゃない。だから、私は恩を
返すの。私に出来る精一杯で」

「ヒューカツコイイー！！」

「ちよつ！馬鹿にして！！」

「パンスコと怒るりーさんだけど、友達の前であんなクサイセリフを
言うのが悪いと思う。そんなのからかつて下さいつて言つてるよう
なものだ。」

「ほら、りーさん！わたしも手伝うことない！」

「もう、じゃあバケツに水を汲んできてくれるかしら？」

「はーい」

それからしばらくりーさんのトマトのお世話を手伝つた。凄いん
だねーシユガートマトつて、グラム単位で水やりするんだって。

『由紀ちゃん。今どこ？屋上？胡桃ちゃん走つてる？』

ひと段落したところで直接脳内に声が掛かる。読み終わつたのか
な？言われて屋上の手すりから下を覗く。

『あ、くずはちゃん。ううん今先輩が見本見せてるところ』
『あ～なるほどね～・・・早くくつ付けばいいのにね～』
『ね～早く付き合つちゃえばいいのに・・・』

あの二人が好き合つてることなんて、陸上部皆とりーさんやくずはちゃんだつて知つてる。中学校から追いかけてもう大学まで一緒らしい。妬けちゃうよね、まつたく。

「おーい、くるみちゃん!!」
「恥ずかしいからやめろー!!」

「くるみちゃんだつて人前でいやついてる癖に!!」

「は!? ば、お前!!」

慌てる二人をりーさんと一緒にあらあらと眺める。こうしているとなんだか大人になつたような気がしてくる。
ただの出刃亀さんなんだけどね。

ふと、正門からフラフラと人がやつてくるのが見えた。
急に、咳き込む人が現れ始めた。
嫌な、予感がする。

「いたいた。丈槍さん、お手伝いなら構いませんが、屋上は本来園芸部
以外・・・」
『「くずはちゃん!! 何かおかしい!!』』

先生が一人、喰われた。
日常が、終わつた。